

一時期は衰退してしまった琵琶湖の淡水真珠。 事業復活の取り組みと新たな貝殻の活用を模索。

琵琶湖の東側に位置する西の湖でイケチョウガイの養殖を営む齋木産業株式会社の齋木勲さん。五十嵐智一さんと訪問しました。養殖の歴史と苦難、今後の展望について熱く語って頂きました。イケチョウガイの貝殻利用をガラス商品とともに展開できればと期待を寄せてくれています。

聞き手／株式会社黒壁
広報担当 北村 馨

齋木 私が初めて真珠に触れたのは、50年くらい前です。当時はここ西の湖に法人だけで十何社あったんですよ。西の湖の面積が280万㎡、そのうち養殖に約100万㎡使っていたのですから相当な規模でやっておりました。浄化作用もありますので、西の湖というのは「溜枡」みたいな形で浄化作用をしながら琵琶湖へ水を流していたんです。その当時はここに相当な貝もおりまして、天然の貝も卵を産んでいましたので、相当な漁獲量をあげていました。5円玉くらいの大きさで、1000円くらいしていた時期もありました。それがだんだんと減少し、さらに昭和の終わりに外来種のカナダモが大発生しました。どれくらいあるか積算したら、推定で3,000 t。もう船が通れないくらい。それで、日本で初めてアベスターという刈り取り船を導入しました。とにかくこのままでは魚も貝もない死の湖になってしまうということで、民間で十何社が立ち上がり、相当な資金援助と人員も出して頂いて、やっと波が立ちかけたのが1ヶ月後でした。その時には既に貝は酸欠でみな死んでおりました。その次の年も、べったりとまではいきませんでしたが、やはり水草は生えてくるわけです。2年続けて刈り取りをやりまして、だいぶ落ち着いてきました。人力では無理があるということで、いろいろ試行錯誤しながらやってきました。そうしてようやく琵琶湖の質が良くなってきたのです。しかし、この真珠しか知らないということもあって、生き残った貝をかき集めて細々とやってる人もいたんですけど、生産量そのものは上がりませんでした。



平成21年度に国から、とにかく琵琶湖のイケチョウガイを復活させてくれと言われました。それならということでやり始めたのが「運の尽き」やったんです。こんな苦勞しなければならないと思わなかった。滋賀県には貝がないから、まず卵を産まそうと少ない卵をかき集めました。そこから3年間貝をやれということで、さらに2年たちました。それではお役御免でしようなら、私はそういうつもりでおりましたら、国の援助で雇った従業員をクビにしたら困ると言われました。半分はそのまま雇って、できた貝で真珠作って、国の金使ったんだから源泉税で返しなさいと。確かに残った貝をそのままにしとくのはもったいない。それを有効利用するにはみんなが研究する必要がありました。

かつての貝と違って、今の貝は貝殻が薄いんです。というのは、昔のイケチョウガイにいろんな貝がミックスされてしまっているのです。琵琶湖に生きていけるのはミックス貝だけになってしまったということです。見た目もちょっと違うので、おいしいということは気づいてはいましたが、イケチョウガイでなければ真珠はできないのでとにかくこの貝を大事に育てていくところから始まりました。本来なら平成21年で終わっている事業なんです。

それが何の因果か、こうして黒壁さんとお出会いさせてもらったわけですね。やっぱり若い人はパワーありますわな。前を見ておられるので、いろんな人に出会わして頂いて、いろんな意見を頂いて。みんなやる気満々な人ばっかりだから、今度は私が辞めるわけにはいかないようになってしまった。そこそこできると報道機関が入りかける、国の機関が応援するやら、いろんなところからとにかく琵琶湖の真珠を復活させろという声を頂きました。そうかといっても昔の業界には古い人間しかおりませんので、何とか盛り返すには若い人の力があるだろうということでいろいろやってたんですけど時間がかかるんです。例えば今年に真珠の核を移植したら、3年先しか収穫できないのです。それが、なかなか新規業者の参入を難しくしているわけです。そういう価値を見て頂ける方に参入をお願いしたいと思っています。前やとった人が「私もやるわ」といった、そういう話も出てきました。



五十嵐 養殖をですか？

齋木

そう、養殖。「オペするの忘れてもうたから教えてくれ。習いに行くわ。」とか、そういう話が出てきました。また、かつての取引先から日本の琵琶湖でやってくれという話がでてきて、何とかそのベースにのせたいなと思っています。3年たって開けてみるまで分からないけど、逆にまた夢もあるんですよ。真珠は丸いというイメージあるかと思いますが、私は丸い真珠にあまり魅力を感じません。(パネルを見ながら)これが真珠の植え付けです。この細胞というのが人間の細胞と同じで、他人に植えつけたら癌になる。そういう形で中に入れるわけです。いわゆる人間でゆうたら癌を作ること。

五十嵐 人間にしてみたら癌をつくるっていう言葉がすごいですね。異物をね。
齋木 貝は異物が入ると治そうとする力が働くわけです。それがいわゆる真珠なんです。ここが外套膜で、真ん中がボディ。外套膜に入れて真珠を作る方法と、ボディに入れて真珠を作る方法の2通りあります。

北村 硬いものを植え付けるのかなと思ってたんですけど。
齋木 これが核なんですけど、これだけでは真珠にならないのです。これは貝殻を丸くしたもののなんですけど細胞と一緒にに入れてやらないと真珠にならない。

北村 真珠の格は貝殻の材質なんですか？
齋木 これは世界で規格が決まってましてね、淡水貝の貝殻を丸くしたものです。

五十嵐 あれ、もうすでに穴が開いてる。
齋木 これね、穴が開いているでしょ。これには理由があるんです。
五十嵐 もしかして、出来上がった時に通すためのものですか。
齋木 じゃないんです。この穴の中にピンを入れましてね、細胞をひっつけてやります。



五十嵐 ああ〜、なるほどなるほど。
齋木 この場合はもっと小さくなりますけど、これを一緒に貝のボディに入れてやる。ボディに入れる場合は大玉になりますのでね、死亡率も高くなりますし、それだけの技術がいります。これは穴をあける専用の機械がありますのでね。

五十嵐 ドリルみたいなやつ？
齋木 超硬の針で。普通の針でしたら焼けてしまいますのでね。
五十嵐 このちっちゃい穴で大丈夫なんですか？
齋木 こういうふうに。
この先にこの身をくっつける。ここへ突き刺して、身をつけて、一緒に中へ入れてやって抜くと、核を吐き出してしまっても細胞が残ってるから必ず真珠になる。核とうまくくっついてくれたら丸い真珠ができるということなんです。原理的にはね。日本で1kg生産したら、中国では1tくらい。ところが生産は半分くらいに落ちてるんです。人件費の高騰や環境の悪化でだんだん落ち込んでいる。琵琶湖でどんなのがいるのかって言ったら10mm。でも10mmが一番作りにくい。もっと小粒だとか言ってくるんです。なんでもいいと言ってくれるならチャレンジしようがあるけど。これから先若い人が育つためにはオリジナル、これが琵琶湖産ですというのを作らないと先がない。ここでしかできないよというものがね。

北村 琵琶湖真珠の魅力ってなんですか？
齋木 真珠層が厚いということですね。これはもう全然違うんです。南洋真珠も厚いんですけど、あれは2年ものなんです。三重県の阿古屋貝はだいたい半年から1年。

北村 早いんですね。
齋木 琵琶湖は3年。ですから、ちょっと見にくいんですけど例えばこういう真珠。年数かけてでもそのあたりはありませんから。なんでかという、一応これ動物性の宝石ですのでね、1個々の特徴を出さないといけない。しかも琵琶湖にしかこれはないという形や色とか、そういうのを出していかないとなかなか難しいんじゃないかな。

北村 色はどうやってつけるんですか？
齋木 貝殻の内側を見て頂いたらわかるんです。ここの筋肉と細胞部分。ここの色によって真珠の色になる。一番重要なのが細胞部分。この細胞部分によって、真珠の光沢だとか色味だとか左右されます。



細胞にする貝がなくなったことがあったので、いろいろやりました。もっとこっぴどくしたらどうかとか、海の貝を琵琶湖の貝にいれたらどうか、いろいろテストやりましたが、だめでしたね。

北村 どうだめでしたか？
齋木 真珠じゃなくて全然腐ってしまった。熱伝導率も違いますし。ちょうどこっぴどくこちらが二枚の膜になってるんです。こっぴどく上は筋肉と細胞がひっついていて。ここに細胞を入れてやりますと真珠になるわけです。筋肉と細胞ですから、うまく細胞と筋肉を切り離す、その作業がいわゆる技術。これが筋肉を取った後の細胞の形。これをいかに薄くきれいにとかというのが技術。これさえマスターすれば真珠は簡単に作れます。貝をあけてこれを入れるんですけど、目の慣れも要ります。

五十嵐 暗いんですね。
齋木 外套膜はまだわかるんですけど、ボディに入れるのが全く見えません。カンが頼りで。

北村 先程もおっしゃってたと思うんですけど、今後真珠養殖がどのようになっていったらいいなと思っておられますか？
齋木 価値の追求という部分になってくると、真珠の価値は何なんだということを追求をしていかなければならない。それは大きさなのか、光沢なのか、形なのか。それぞれの人によって違ってもうんですけどそれをみな兼ね備えたのがよいということです。オリジナルということになってくると、琵琶湖でしか作れない形がやはりオリジナルではないか。しかもそこには適度な光沢がある。そういうのが琵琶湖産の目指すところではないか、それを目指してもらいたい。

北村 ありがとうございます。1年前から試行錯誤してようやく「粉」や「螺鈿」というものにたどり着き、こうしてガラス作家の五十嵐さんが茨城から来てくださったんですけど、こういう取り組みについてなにかメッセージはありますか？
齋木 私はガラスの事は全く分かりませんが、琵琶パールが参加することによってガラス製品そのものの付加価値を高めるとか、オリジナリティを確立するとか、そういう方向になってくれればと思います。絶えず無限への挑戦というのが私の好きな言葉です。若い頃は常に夢を持ってました。とにかく何かで日本一になってやろうと、人にできないことをやりたいなあと。若いころはみな挑戦だったね。

北村 一番危惧していた後継者問題は最近息子さんが継いでくれるということで解消したとお聞きしましたが、息子さんに一言お願いします。
齋木 飯が食えるかどうか心配な面がまだあります。一番やらないといけなことは、琵琶湖はまだ貝が足りないの、貝をとにかく作ることです。そこではじめて挑戦ができると思います。そのうえで貝は無限にある、好きなように使ってよりオリジナリティのある真珠に繋がると思います。琵琶湖に行ったらこういう真珠があるぞということを皆さんに見てもらえるようになってほしいですね。

北村 後を継がれようと思ったきっかけみたいなものは何ですか？
齋木(ご子息) 昔からこの仕事に興味がないわけではなかったのですが、やっぱり下火になってきているというところで外に出てたわけなんです。ところが、親父からなんとかならんかと声をかけられたんで、じゃあ真剣に考えてみようかということになりました。

北村 嬉しいですね。
齋木 ありがたいことに新しいとこも、休眠状態の養殖屋からも「やってみようか。教えてくれるか。」という話が出かけたという事は、それだけ真珠に対する評価が上がってきたと思います。こういうのを作りたいというのを貝を媒体にしてできた時の喜びってのは最高です。いろんな人にお世話になって、今から思ったらよくできたなと。

(つづく)

